

うとした、という発想だったと思うんです。それと同じことを我々は違うレベルでやっているわけなんです。

3月のこちらでは2度目の演奏になるわけですが、バッハが一番最後の演奏でやったと思われる1742年ぐらいのチェンバロも入れたかたちで演奏したいと思っています。そういう意味では楽器編成上もっとも大規模なものになるんですよ。十分響きを満たすパワーを得られるようにしたいと思っているし、《マタイ受難曲》の福音書が持っているメッセージを正しく伝えたい。今回はエヴァンゲリストは合唱を歌わずそれに専念して歌って、各アリアを歌う人たちが、個人的な感情、信仰感情を表現していきます。

バッハの歌詞というのは、いまのドイツ人にとっても実は非常に難解なものなんです。音楽がそれを釈義してくれるというかな、解説してくれるという面が非常に強いんです。《マタイ》の音楽を通して聴けばイエス・キリストの言葉をひとつ聴くとしても、どういう雰囲気の中でどういう意味のものなのか、感性を通してわかるということが非常に重要だと思いますね。

《ブランデンブルク協奏曲》での新たな試み

6月に演奏する《ブランデンブルク協奏曲》は、またバッハの《マタイ》とは全然違った局面で、宮廷音楽に属するものです。これは大変すばらしいコンチェルト集で、どういう点で素晴らしいかというと6つが6つとも、まったく違う楽器編成になっていて、ちょっと他に例がない編成なんですね。

今回の演奏での一番大きな特徴は、弦楽器のほうでヴィオロンチェロ、いわゆるチェロのパートにヴィオロンチェロ・ダ・スパラという肩にかけて横向きに弾く楽器を使ってみようとしていることです。

《ブランデンブルク》では、特に第3番がヴァイオリン3つ、ヴィオラ3つ、チェロ3つ、という編成になっています。いつもこの曲を演奏するときに苦勞させられる点で、ヴァイオリン3つに、ヴィオラ3つに対して、チェロが3人集まると、すさまじい音がする。な

にか不自然な編成に見えるわけです。そこをヴィオロンチェロ・ダ・スパラでやってみると、全員が横向きに弾く楽器を3・3・3で持つかたちになる。3という楽器は聖なる数字であって象徴的で、それを第3番に使っているわけです。

もうひとつは、第6番。ヴィオラが2つとチェロ1つというかたちで、非常にソリストティックな動きをします。ヴィオロンチェロ・ダ・スパラを用いると2つのヴィオラと、音域的には1オクターブ違う同じ構造を持った横向きの楽器を同時にそこで演奏することができる、というわけです。それで演奏した時に、寄り添うようなキャラクターというのが大変効果的ではないかということで、これを試してみたいんです。日本では初めての試みだと思います。

我々は「響き」という観点から、なるべくオリジナルに近いものにしたいということがひとつあり、いま残されている資料の中から、ありうるべき姿を現代にもう一度映し出したいという思いがあります。古楽器を使って演奏していると、あたかも当時の再現のように受け取られがちだけど、それより、作品に含まれる様々な情報のいろいろな「層」を現代にどう再現したいか、ということなんです。それは、現代に生きている我々が現代人のためにやるわけですからね。

profile

鈴木雅明 (すずき まさあき)

東京藝術大学作曲科卒業、同大学院オルガン科修了。スウェーリンク音楽院でチェンバロとオルガンを学ぶ。1990年、バッハ・コレギウム・ジャパンを結成。J.S. バッハの宗教音楽作品を中心に幅広い活動を行っており、海外ツアーやCD録音でも高い評価を得ている。2000年度音楽之友社賞、01年毎日芸術賞受賞。01年ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章受章。03年、辻荘一三浦アンナ記念学術奨励金受賞。東京藝術大学教授。

バッハ・コレギウム・ジャパン

世界的なオルガン・チェンバロ奏者で東京藝術大学教授の鈴木雅明が、世界の第一線で活躍するオリジナル楽器のスペシャリストを擁して1990年に結成したオーケストラと合唱団。特にJ.S. バッハの宗教作品を中心とするバロック音楽を理想的に上演・普及させることを主旨として演奏活動を行っており、バッハの教会カンタータ全曲シリーズをはじめとして録音も多数リリースし、国際的に高い評価を得ている。

●●●● MUSIC ●●●● バッハ・コレギウム・ジャパン

バッハ《マタイ受難曲》

【日時】3月20日(木・祝) 開演 15:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

【出演】鈴木雅明(指揮) エヴァンゲリスト(テノール):ヤン・コボウ イエス(バス):マルクス・フライク
ソプラノ:ハナ・ブラシコヴァ、藤崎美苗 アルト:ダミアン・ギヨン、上杉清仁 テノール:バク・スンヒ
バス:ドミニク・ヴェルナー バッハ・コレギウム・ジャパン(合唱・管弦楽)

【チケット(税込)】好評発売中

一般:S席8,000円/A席7,000円/学生A席2,000円 メンバーズ:S席7,200円/A席6,300円

●●●● MUSIC ●●●● バッハ・コレギウム・ジャパン

バッハ《ブランデンブルク協奏曲》全曲演奏会

【日時】6月14日(土) 開演 17:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

【出演】鈴木雅明(指揮・チェンバロ) バッハ・コレギウム・ジャパン(管弦楽)

【チケット(税込)】

一般:S席6,500円/A席5,000円/学生A席2,000円 メンバーズ:S席5,850円/A席4,500円

【発売日】一般:2月9日(土) メンバーズ:2月3日(日)



ヴィオロンチェロ・ダ・スパラ

文=寺神戸 亮

チェロという楽器が生まれたのは1660年ごろ、といわれています。ヴィオローネの小さいものという意味からヴィオロンチェロと名付けられました。そして当初はヴィオロンチェロ・ダ・スパラ、すなわち「肩のヴィオロンチェロ」と呼ばれる、かなり小型の楽器がありました。

バッハゆかりの地ライプツィヒやアイゼナハなどにもこのタイプの非常に小型のチェロが残っており、恐らくバッハが称するところのヴィオラ・ボンボーザではないかといわれてきました。そして最近

の研究で、それはヴィオロンチェロ・ダ・スパラのことを指しているのだらう、ということがわかってきました。肩から紐で吊るし、ギターのように横に構えて弓で弾きますが、ヴァイオリンに近いテクニックで演奏されます。

「チェロ」という楽器の定義自体がまだあいまいだったバッハの時代、この楽器が普通に「ヴィオロンチェロ」という名前でバッハの作品中で演奏されたであろうことは想像に難くありません。